

時 話 題 の 人



渡辺 利夫

Watanabe Toshio

拓殖大学学長。1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。専攻は、開発経済学、現代アジア経済論。主な著書『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞受賞）他。

今、いちばん厳しい時期にある 冷戦崩壊後の極東アジア地域外交

国防や国益という、国として取るべき立場の輪郭を、この国は意識的に曖昧にしているのではないかといぶかしく思うようになって久しい。中国、韓国、ロシアに、日本列島がいつの間にか侵食されていく危機感はないのか。

竹村 先生は「周辺国の敵対的行動が目立つこの頃は、福沢諭吉が『脱亜論』を書いた時代とよく似ている」と『新脱亜論』（文春新書）で書いておられます。渡辺 冷戦が崩壊したら穏やかで平和な時代がやって来るかのような説が一般的でした。実はまったく逆で、むしろ冷戦の崩壊が、周辺諸国の日本に対する挑

戦的で敵対的な外交を誘発してしまっただという印象が私には強いのです。竹村 冷戦のときはソ連対アメリカで、日本はアメリカの蔭に隠れていればよかったですね。渡辺 そうです。中国は冷戦崩壊によ

文化放送(日曜am7:00~7:30)

●札幌テレビ放送(7:30~) ●東北放送(9:30~) ●北日本放送(9:00~) ●東海ラジオ(9:00~)
●大阪放送(9:00~) ●中国放送(7:00~) ●西日本放送(9:00~) ●九州朝日放送(9:00~)

って北方の脅威から開放され、海洋軍勢力を増強して、東シナ海の制海権を握る方向に向かっているのではないのでしょうか。

日本人は、とかく日中中間線の問題を、ガス田開発の問題としてとらえていますが、ずいぶん矮小化した見方だと思えます。目的は制海権ですよ。

もつとわかりやすくいうと、第七艦隊が東シナ海に進入できないように機雷の設置場所を調査しているというのが本当のところですよ。

それから冷戦崩壊によって朝鮮半島の統一ベクトル、特に南の北に対する親和的な政策が一気に前面に出てきました。核付き統一ということも、かつてに比べればかなりの確度で実現する方向に向かっているとは私は見ています。

竹村 核を放棄しなかったら話し合はできないといっていたアメリカの考えが、いつの間にか後退しましたよね。

渡辺 ブッシュがレイムダックになったということもあるのでしょうか、六者協議はどうとう米朝合意の追認の場になってしまった。情けない話です。

開国・維新から日清戦争開戦以前までの日本の指導者たちは、国がなくなるか

もしれないという強度の恐れをもって列強に立ち向かったのですが、それは朝鮮半島の地政学的な位置付けのゆえでした。

朝鮮半島は、ユーラシア大陸からナタのような格好で日本列島にせり出しています。昔は空軍はありませんでした。海軍と陸軍のみです。ユーラシア大陸の諸勢力が日本に攻めて来る場合には、必ず朝鮮半島を通らなくてはならない。事実、歴史を振り返ってみるとそうでした。

地政学的に見た

日本、朝鮮半島、中国

竹村 地図をさかさまにしますと、日本が大陸国家に覆いかぶさるような格好になっています。海軍にとつて、目の上のたんこぶのような位置にある。

渡辺 そうです。今、中国はすでに南シナ海では制海権を握っています。南シナ海に面している国は、そういつてはなんですが、比較的小さな、対中交渉力の弱い国です。

九二年に「領海法」という中国の国内法ができました。この法律に基づいて中

国の地図上には領海のラインが引かれています。沖繩のあたりまでが中国領になっています。

中国の大陸棚が東のほうにせり出した東端が沖繩トラフです。これが領海法では国境と見なされていて、尖閣諸島はそこの中にあります。中間線などというコンセプトはまったくありません。

ですから私の所にいます中国の学生たちも皆、そういうものだと思いつ込んでるわけですね。いくら論争しても、聞く耳は持たない。

竹村 外務省の役人たちも、中国にそういう考え方を聞かされるのですか。

渡辺 ええ、年中、聞かされています。江沢民の時代には特にひどかったのですが、胡錦濤政権になった後は、国内の困難な諸課題ゆえでしょうが、若干、トーンダウンしております。

けれども、共同開発するはずだった二島のうち一つを、胡錦濤さんが来たときの合意に反して始めてしまっています。日本は弱腰すぎて、さしたる抗議もやっていません。

竹村 一応日本も、尖閣列島には海上保安庁の船を一隻、常駐させていますよ。
渡辺 黙って認めているわけではないよ

という、国民に対する「弁明」だけでしょう。

竹島は韓国では韓国領ということになっています。李承晩ライン以来ですよね。現在では警察官から住民まで任んで実効支配しています。地方統一選挙ではここで投票までやってみせました。

竹村 そうですか。そのうえ対馬まで韓国領だと教えられているそうですね。

渡辺 ええ、韓国が金に任せて島内の土地を買い捲っています。

冷戦崩壊後

いちばんの危機は今

渡辺 宮古海峡とバシー海峡という海峡があります。中国は自由にそこを通過して太平洋に出入りしています。

私は、極東アジア地域外交においては、冷戦が崩壊した後の現在がいちばん厳しい時期にあると考えています。このまま手をこまねいていけば、いよいよひどいことになりうる。

冷戦崩壊後の現在が外交的な緊急課題を最も厳しく抱えている時期だと思っ

ていません。

竹村 このままでは、日本の独立性や安全性が損なわれる可能性がある。

渡辺 そうです。李朝時代の朝鮮は、当時の清国に完全に服属していました。李朝の末期になると政争と内乱が年中起こっていて、その内乱や政争を収めるために、いつも清国からの大量の軍隊の派兵を要求していました。

つまり清国と戦わざれば日本の生命線である朝鮮半島の安定は保てない。これが極めて冷徹な陸奥宗光の判断によって起こされた、日清戦争の原因です。

竹村 そういう歴史観は、今の日本人にはないでしょう。

渡辺 まるでないでしょう。しかも、日清戦争にしろ日露戦争にしろ、これがある種の悪であるというふうには、戦後の日本人は思わされてきたわけです。

同僚や若い学生と話をしているうちに、たなと思うのは、現代の価値観で過去の歴史を判断していることです。現代の考え方では、他国の領土に勝手に入ってその住民と土地を支配するなんて侵略以外の何ものでもないのですが、当時は力のある者がそうしなかつたら、必ず別の力のある者が、そこを取りに

来たわけですからね。

日本が手を付けなかったならば、朝鮮は必ず、まずは清国、ついでロシアのものになっていったでしょう。そうしたら日本は、旧ソ連邦下のフィンランドみたいになっていたでしょうね。陸奥宗光や小村寿太郎は本能的にその危険を直感していたわけです。

ですから、当時、日本よりも遙かに大きな軍事力を持っていた清国に挑み、世界最大の陸軍大国ロシアにも挑んで、皮一枚の僅差であつても、ともかく勝つたのです。

あの二つの戦争のいずれかに負けたら、今日の日本はありませんでした。保護国か植民地になっていたでしょうね。

竹村 植民地制度は欧米諸国がやるものだと、日本人は思い込んでいます。

渡辺 現代は、人、物、金、技術、情報などが国境などないかのように行き交う時代です。国境概念とか、国境の内側で紡がれてきた歴史などというものには意味がないと考える「ポスト・モダンズム」が先進国の知識人の胸中を覆っています。

日本がEUの一員であればそれもけ

拓殖大学海外事情研究所 安全保障シンポジウム

『アメリカ新政権とアジアのゆくえ—2009年を読む—』

第2回 アメリカ新政権と「日米防衛協力」—現状と将来



克

今年一月に開催された拓殖大学海外事情研究所主催「安全保障シンポジウム」講演にて（写真提供/渡辺利夫氏）

つこうだと思えますが、日本の周りは「十九世紀的な」という形容を付けたいくらいの激しいナショナリズムの、つまりモダニズムそのものの国々です。

ナショナリズムをたぎらせている周辺諸国の中で、日本だけがポスト・モダンの涼しい顔をしているという、実に奇妙な構図が、現在の極東アジアじゃないか

と思えます。特に現在の指導者や知識人たちのものの見方にはそういう奇妙さがあります。

竹村 空幕長の本にはそこまでの記述はなかったとは思いますが、日本の地政学的な位置を考えたらもうちょっと敏感になりなさいということですね。

渡辺 あの論旨にはまったく揺らぎはありませんが、ああいう立場におられた方が、ああいう場で、ああいう発言をしていいかどうかという点には、複雑な気持ちがあります。

竹村 それでもマスコミが騒いでくれると、日本人が普段忘れていることを考えるチャンスにはなります。

渡辺 パワーポリティクス、メカニズムが、帝国主義時代と現在とではまるで変わってしまったかのようにいうのは、極東アジアについていう限り、まったく嘘だと思えます。やはり力の政治です。

竹村 そうすると、EU諸国みたいに繋がるような構想は無理ですか。アジアでも、という声はあるのですが。

渡辺 無理に決まっています。東アジア共同体というのは、およそ幼稚園のマンガみたいなものだと思っています。友好や親善はおおいにやって欲しいのですが、東アジア、特に中国、朝鮮半島と善隣・友好関係を結ぶというのは、なかなか容易なことではない。

いつも思うのですが、互いに礼の国なので、盆、暮のつき合いとしてのODAは欠かさないで、付かず離れずの淡い関係を続けていけばいいのではないのでしょうか。対照的に、アングロサクソン国家とのつき合いは、相互の信頼を得られるよう、より一層の努力をするべきだと思えます。

北朝鮮への対テロ支援国家指定解除やアメリカ発の金融危機も加わって嫌米的な感情は盛り上がっていますが、日本人がアメリカを変えることはできません。ましてや中国を変えることはできません。アメリカに信頼される日本として、日米同盟を強固にしていけば、道はないのではないのでしょうか。もし、日米同盟を廃棄してしまった場合、日本人は枕

を高くして寝ることはできません。アメリカから切り離された日本は、中国や朝鮮半島にとっての明らかな標的になりますよ。

われわれの世代は、いくら論理的に正当化しようとしても、朝鮮半島や中国を侵略したという歴史的事実に、何か負い目にも似た感情を持っていますから、何をいわれようと耐えられません。しかし次の世代は耐えられない可能性がありません。

日本は厳たる民主主義国ですから、軍事大国が核保有国かを、民主主義的な投票行動を通じて選択できるわけです。

毎日のように学生とつき合っていると、彼らが少しずつ、少しずつ、排外主義的な、あるいは日本主義的な心情に傾いていくことが非常によく見えます。今のような安易な外交をやっていると、次の世代が相当の強行策に出してしまう危険性があります。これは日本最悪のシナリオじゃないかと、私は思っています。

中国や韓国で知識人と話す時、私は必ず最後にそのことをいいます。「歴史認識問題であれ何問題であれ、君らの外交カードだから使いたいだけ使って押し捲るのはおおいにけっこうだけど、日本人

は私たちだけじゃないんだよ。次に生まれてくる若い世代があるんだ」というんですよ。

歴史を知らない日本の若い世代が、中国にここまで屈辱的な扱いを受けて、黙っているとあなたたちはお考えですかという、しばらく黙り込みますね(笑)。

竹村 学生を含めた若い世代は、先生の本を読んでくれているようですか。

渡辺 こんな本は十年前なら出版ベースにも乗らなかつたでしょうし、出しでも売れなかつた。しかしおかげさまで版を重ねております。

こんな重い内容の本がなぜ売れるのか考えると、日本人の危機感も相当になっているのだなあと感じます。

竹村 陸奥宗光とか小村寿太郎といった人を、もうちょっと大きな視野で学びなおすことも大切かもしれませんね。

近現代史を振り返り

経験則で「あるべき姿」を

渡辺 今後の日本を考えると、国際政治学とか国際関係論とか国際経済学とか、秀才が理論的に考える戦略では

やはり駄目だと思います。

日本人が現実に経験してきたこの百数十年の近現代史の中で、いつ日本人が幸せであったか、もしくは不幸であったかを考え、幸福な時代の要因を探り出して将来に生かすことが必要です。

私の結論は「アングロサクソンの海洋覇権国家と同盟していた時代の日本は非常に幸せだった」ということです。

竹村 なるほど。それはすぐに世論の同意を得られる話です。

それに、「地政学的に考えた日本の位置は、中国やロシアなどの大陸国家の餌食になる可能性が非常に高い」という説明は、ぜひ、この機会に若い人に聞いてもらいたいですね。

渡辺 つくづくそう思います。

竹村 空幕長の本のようにセンサーショナルに扱われると、もつと多くの人に読んでもらえるのかな。

渡辺 いや、あれは逆に村山談話に正当性を持たせるような理屈に陥るといふ妙な副産物が出ていませんか。村山談話なんて、本来が何の意味もないものなのですよ。

竹村 非常に考えさせられるご本の紹介でした。ありがとうございます。▲